

音楽科教育における学習指導案の研究

A Study on a Teaching Plan of Music Education

岩 崎 洋 一

Yoichi IWASAKI

(1989年9月9日受理)

I 序

今日の教育界を取り巻くうずは、個性・個別化が前面に打ち出され、自己教育力の充実が標榜されるなか、学校教育の硬直化の打破や入試本位の教育の是正など、教育の再創造が叫ばれている。

平成元年度に改訂された学習指導要領では、社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成を目指し、音楽科においては、音楽に対する豊かな感性を培うことに重点を置き、個性的、創造的な学習活動の展開が謳われている。

これは、幼稚園、小学校、中学校、高等学校の流れと発達を見通し、幼稚園での、「表現の技能的な上達をめざすものではなく、遊びを通してねらいを達成させる」とした教育要領の提示は、今後の学校教育のあり方を如実に反映している。それは、日常生活を通して音と子どもたちがかわり、何らかの感覚、表象を育てるということであり、個性を生かす教育の充実は、音楽を子どもの側に置いてこそ、学習者が自ら音楽を見出し、表現し、作り、感じる事が可能になるのである。

子どもたちにとって音楽の授業は楽しいものであり、その楽しさが持続し、その中で必要な技術、技能、知識が付加的に身に付いていける場であればならない。そうした子どもたちへの教育を、学校では総合プランである教育課程に編成し、年間の意図的、計画的な営みである学習指導計画が組織されるのである。そして、日々の教授・学習は学習指導案というかたちで教師により計画、準備され、授業として実行されるのである。その学習指導案には、題材全体の授業計画とその具体的な展開の内容が総合的に記述され、教材と子どもたちを結ぶ糸として、織りなされているのである。

本稿では、学習指導案の様式や内容を今日的課題に照らして検討し、音楽の授業が子どもたちにとって、わかりやすく、楽しく、感じ、表現できる場となるための学習指導案の見直しをするもの

である。

II 学習指導の組織化

学習指導は、教授・学習が連動するなかで教科の内容の習得、体得を目指し、教材を伸だちとしながらつくり出されていく動的過程である。

そこには、教える側と教わる側のたゆまざる相互作用が組み込まれ、教師の発した情報が、子どもたちの内部に合意と矛盾を引き起こしながら、子どもたちは自分自身の問題として自覚し、解決していくのである。

本来、音楽は日常の中にあるものから、自然の営みとして表出され、音として存在した時に、それを受けとめる側の中にその存在が感じられるのである。それは、学校教育においてもその基本は変わらないであろう。ただし、組織的に教育課程の中で学習指導計画として立案され、授業としてこれまでの文化遺産の伝達を主にした学習として仕組まれる場合、これまでの多くは、音楽の構造や要素を理解することによる音楽の感得や、技術指導の蓄積による音楽の表現といった場面が多く存在してきた。

ここに、これまでの音楽の授業内容を表わす一つの断面として、次の様な文章がある。

「私たちの音楽の授業は、いつも同じことのくりかえしです。『もっと強く』とか『腹から声出せ』というよりも、『この曲はこんな風に歌ったらどうか』とか『こんな情景を思い浮かべて歌ったらいいんだ』というように、『歌いたい』という意欲をかきたてる授業をしてほしいとおもいます。」⁽¹⁾

このことは、これまで音楽の授業では子どもの心情面や感覚を大切に、子どもたちのための学習ということが叫ばれてきてはいるものの、授業の展開の中では、音楽にアプローチする手だてとして、何げなく生のかたちで音楽の要素が位置づ

けられ、無意識のうちに、抽象的な伝達に落ち入りやすい機能になってきているのではないだろうか。授業では、教材が意味する内容を直接歌ったり、しゃべったり、体を動かしたり、演奏したりしながら、直接的に経験、体験する場をつくり出すことが求められているのである。

授業では教材を仲立ちとして教育内容、すなわち、教える内容を子どもたちが獲得できるように教師は様々な行為を行う。それは、教育内容を獲得させるための目標の設定であり、目標の具現として、吟味された教材と教具が配置され、子どもたちはそれを学習活動の対象としていくのである。そこには、教師の働きかけ、仕かけの構想が学習指導案というかたちで設計され、それによって子どもたちの思考や表現が動的過程として組織されていくのである。

では、なぜ学習指導案を書くのであろうか。それは、①教育内容をどのように伝達するか、②わかりやすい授業のために、③発問、指示、説明を明確化し、④授業構想を明瞭にするものである⁽²⁾。そして、そのことは、子どもへの方略とともに、教師の教育内容を見通す力を磨くことにもつながるのである。

それでは、これまでの学習指導案はそのままで良いのであろうか、指導案の意味、機能を見直してみよう。吉本均によれば、これまで「与え=授ける」といった形式段階論の指導案や、子どもたちの学習活動の流れをうまく見守り、調べさせたり、発表させたりするときの方法、態度についての「留意点」が教師の着眼点とする、「調べさせ=見守る」指導案といったものが多いとしている。そして、一問一答する授業は今日の受験体制のもとで強くなる方式であり、子どもの発表、発言が活発であっても、科学や芸術に対する認識、イメージの発展に結びつかないケースが多いとしている。それ故、これからは「働きかけ=学びとる」指導案が重要であるとし、①「教えねばならない」ものを「教えたい」ものにする教師の教材解釈=認識を確立することであり、②「教えたい」ものを、子どもたちの「学びたい」ものへと転化、発展させる、一連の発問づくりの必要性を提唱している⁽³⁾。

教師にとって明確な子どもの側に立った教材解釈は、子どもの成就感と満足感を保障する方向である。そうでなければ子ども自身、実感が伴わない授業に陥ることにもなりかねない。また、子どもたちにとっては1時間の授業が全てであり、力一杯活動することで、音楽的能力を積みあげ、具

体的な力をつけさせてやらなければならない。そして、それを保障するのが音楽の本質にねざした教師の働きかけなのである。

その、教師の子どもへの働きかけ、すなわち、学習指導を組織化するためには、そこに働く種々の力と要素が効率よく組み合わせられ、具体的な教授・学習の過程として構築されなければならない。それは、①教材、②教師の活動、③子どもの活動、にそれぞれかわる要素が組織化され連動し、教師は子どもたちの学習活動を援助、補佐するために、問いかけを行ったり、指示、説明、技術指導など、現実子どもに向きあう場面での多様な働きかけをすることなのである。

それでは、音楽科で求められる学習指導を考えてみよう。それは、常に子どもたちが音・音楽にかかわり合いながら学習展開ができ、子どもと教師、又は子ども同士が直接に働きかけ合いながら、ダイナミックに音楽を開展している場面が具体的に見える授業である。教材がいかに素敵なお内容であり、教育内容がいかに価値をもっている、子どもたちが受け止め、習得していかなければ意味をもたないのである。教育内容を習得するためには、実際の教授・学習過程において、子どもにわかる、より具体的な内容として展開されなければならない。それは、教育内容の構造と子どもの認識を踏まえて学習指導を構成し、必然的に規定される教師の発言、援助や、子どもの学習活動を整理して具体的な学習指導の過程が組織され、学習指導案が作成されなければならない。

Ⅲ 音楽をとりむすぶ学習指導案

指導案の一般的な手順を書いてみると次のような内容である。

①題材、②指導目標、③教材、④指導観、⑤指導計画、⑥本時の指導。この中には「題材設定の理由」や「学習結果の評価」は必然的に含まれてくる⁽⁴⁾。

指導案はこのように指導目標が明確に反映されるための手順であり、どのような方法で進めていったらよいのか筋道を立てる実施計画書である。それには、目標へ迫るための手続きと授業の展開がより鮮明にイメージできるものでなければならない。指導案を見ることにより、その内容がより鮮明に想起できるということは、子どもたちにとっては音楽が自分のものとして取り込めやすく、獲得できるプロセスが少なくとも設定されているということである。それは、子どもにとって

は「わかりやすい」学習であり、指導者には子どもに「わかる」指導を提示することに他ならない。

この「わかりやすさ」を生み出す条件として次があげられる。

①1回の指示に含まれる情報を一つに絞ることによるわかりやすさの「簡潔性」であり、②直接目的を指示するのではなく、別のものに置き換えて指示する「間接性」、③教える内容や技術を、比喩や形容詞に置き換えてピッタリ反映させる「実体性」、それに④発想を転換した指示は子どもに届きやすいという「意外性」、である⁶⁾。

この「わかりやすさ」は子どもにとって①理解ができ、②どう対応していいのか、ということである。そこで、日常、授業を仕組んでいく組織的まとまりとしての指導案を、子どもにとってわかりやすく、誰もが、指導者の意図した展開が音とかかわりあいながら、音楽へと組織されていく内容として見えるものにしていきたい。

まず、指導案の中でも本時の指導過程が子どもと音楽をとりむすぶ場面として重要になってくる。これまでの一般的様式は表1を多く見る。

これを基本に他の指導案の様式を見てみよう。

- ・①指導内容、②学習活動、③指導上の留意点、④評価⁷⁾。
- ・①学習活動と内容、②指導上の留意点、③授業の観点、④資料⁸⁾。
- ・①過程、②指導事項、③学習活動、④評価の観点、⑤指導上の留意点、⑥備考⁹⁾。
- ・①学習活動・学習内容、②教具資料、③留意事項、④形態、⑤配時¹⁰⁾。
- ・①教材、②時間、③観点、④到達目標、⑤評価法、⑥評価のための配慮事項¹¹⁾。

これらは、それぞれ研究スタイルに合わせた項目を設定したり、指導者の理念が反映するものになっている。その他、他教科の指導案をみると、それぞれの専門性、独自性が見える様式になっている。

〔家庭科〕

- ・①学習活動、②指導上の留意点、③教具・資料・用具、④板書計画、⑤評価¹²⁾。

〔体育科〕

- ・①学習活動と発問・指示・説明、②予想される子どもの反応と指導上の留意点、③教師の動きと指導的評価¹³⁾。

〔道徳〕

- ・①学習活動・学習内容、②主要発問・予想される生徒の反応、③指導上の留意点¹⁴⁾。

これらの指導案から、音楽科にあまり見られない項目、すなわち家庭科の「板書計画」や体育科の「発問、指示、説明」「教師の動き」、それに道徳での「主な発問」が、音楽科においても子どもたちにわかりやすく、音楽との距離を近づけ、結び合わされる指導案のヒントになると思われる。

それでは、発問を中心として指導案に盛り込み、子どもにゆさぶりを掛けている事例を見てみよう。

- ・教師の発問や説明の覧を設け、授業での発言・活動を実際に文字化することにより、授業の姿がよく見えてくる方式¹⁵⁾。
- ・指導上の留意点に枠をつけて発問・指示を示す方式¹⁶⁾。

これらの項目や書式を新たに設けることは、子どもに伝えたい内容をより具体的な事象、言葉として練り上げることになり、思考を促し、授業展開が明瞭になり生きた活動が生じてくるように思える。

このような指導案については今後の検討課題とし、現段階では次のことを提示したい。

- ①子どもに対する具体的な指示語、指導例を指導案に盛り込む。
- ②「指導上の留意点」を子どもが主体的に活動できる過程を意図した「教師の働きかけ」にかえる。

その理由として、これまで指導案の中に用いら

表1 一般的な様式⁶⁾

目 標	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点

れてきた用語を見ていくと、目標の覧には、「～を感じさせる」「～できるようにする」「～を味あわせる」「～を工夫する」といった記述がよく使われている。これらの指導目標から、指導観において児童・生徒の実態や楽曲の分析を通して本時の目標に敷衍し、めあてとして提示するのであるが、その過程においても同様の用語が多く使われている。それに、学習の展開の中でも音楽にかかわる要素や技術指導が生徒の言葉で出ている場合が多いのである。これらの言葉からは音楽を具体的にどの様に感じ、表現していけばよいか、漠然とは分かるものの、音楽の内容を取り次ぐ教師側の設定としては抽象的であるように思える。

それではどのような作業が必要になってくるのであろう。それを実際の学習展開場面で考えてみると、次の通りである。

①具体的に音楽の内容をとりむすぶ言葉として、動詞、形容詞、名詞等をもちいての情景描写や比喩。これまでの教師の指示語に包括される、子どもと音楽を取り次ぐ用語。

②語彙だけでなく、具体的な絵図式による提示。それでは次に、既存の学習指導案の記述内容を、これらの意図を含んだ書式に置き換えてみよう。その際、指導事項、学習活動、指導上の留意点は既存の学習指導案をそのまま記載し、指導上の留意点の項目を「教師の働きかけ」に入れ換え、新しい意図で記述するものである。表2は中学校の歌唱、表3は中学校の器楽、表4は小学校の鑑賞、のそれぞれ一部を抜粋したものである。

「指導上の留意点」を「教師の働きかけ」とし、より具体的な言葉に置きかえただけでも、漠然としていたものが、よくわかり、見えてくるように

表2 学習指導の展開例〔歌唱〕⁹⁾

指導事項	学 習 活 動	指導上の留意点	教 師 の 働 き かけ
既習曲の歌唱	「ゆかいに歩けば」を斉唱する。 ・歌い方などに注意しながら元気に歌う。 ・2拍子のリズムに乗って、手拍子を打ちながら歌う。	歌っている生徒の表情や姿勢などに注意し観察する。 2拍子の拍子のとり方やリズムに注意させる。	・歌っている生徒の表情が、明るく、さわやかに、跳動感に豊んでいるか、心地よく体を動かしながら歌っているか観察する。 ・2拍子一つを取らせ、はずんだ感じで体を動かしながら、一拍目で体が上にある拍子感覚を身につけさせる。
声の出し方	豊かな響きのある歌声で歌うためには「呼吸の仕方」が大切であることに気付く。 ・ローソクの火を消す時の息の使い方などのまねをして、息の使い方や呼吸の仕方を練習する。	生徒の答えをまとめながら呼吸法が大切であることに気付かせる。	・息を吸った時、お腹のまわりがふくらむ感覚を覚えさせ、息を出す時の下腹から少しの息でローソクの火が一瞬に消えるようにすばやく息を出す。また、しゃぼん玉を膨らませる様に、そっと息を少しずつ出していく時のお腹の様子を自覚させる。
曲の表現	「ゆかいに歩けば」の曲の表現について考える。 ・豊かな響きのある声で歌うことによって曲の感じが生きること気付く。	豊かな響きのある歌声で歌うことが曲の表現に幅が出ること気付かせる。	・明るく、輝きのある歌声が、押えないで軽く歌うことが、曲の表現に跳動感やうきうきした感じが出ることに気付かせる。

表3 学習指導の展開例〔器楽〕⁰⁸

指導事項	学 習 活 動	指導上の留意点	教 師 の 働 き かけ
主旋律の練習	「メヌエット」の跳動する音程に気を付ける。	息圧、タンギング、サミングに注意させる。	<ul style="list-style-type: none"> 息圧が弱くならないようにし、タンギングは [ti] と言うようにして、サミングの指を大きく開けすぎないようにさせる。
主旋律の斉奏	「メヌエット」を音の響きに気を付けて斉奏する。		<ul style="list-style-type: none"> 柔らかく、丸みのある音色をイメージさせ吹かせる。
アルトリコーダーの右手の練習	低いシ、ラ、ソの音の指使いを覚え、旋律を吹く。 <ul style="list-style-type: none"> 低い音を豊かに響かせるための息の使い方、タンギングの仕方を覚える。 	息圧に注意して吹かせる。ていねいに音を出させる。	<ul style="list-style-type: none"> 寒い朝、手を「ハー」と息で温める感じで、ゆったりと息を出させる。又、熱い「うどん」を食べる時の息の使い方や舌の使い方を思い出させ、息の一定量の持続や、タンギングに応用させる。

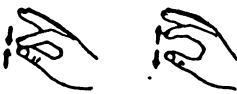


表4 学習指導の展開例〔鑑賞〕⁰⁹

指導事項	学 習 活 動	指導上の留意点	教 師 の 働 き かけ
ワルツの音楽に親しませる	「かっこうワルツ」を聴く <ul style="list-style-type: none"> 曲の様子を想像しながら聴く。 	曲の感じをつかませる。	<ul style="list-style-type: none"> かっこうの鳴き声が出てくることや、流れるような節があることを見つけさせる。
3拍子の拍子リズムを体で感じ取らせる。	「かっこうワルツ」を通して聴く。 <ul style="list-style-type: none"> Aのふしを手拍子で打ちながら聴く。 Bのふしを体を左右に動かしながら聴く。 	ふしを覚えた児童には、口ずさみながら身体反応させる。	<ul style="list-style-type: none"> 音楽を聴きながら「ランラン」や「ラ」で自由に口ずさみをさせながら、3拍子一つに感じながら手拍子をさせる。 スケートをするように、足を大きく前へ踏み出させたり、大太鼓を叩くまねをさせながら楽しく踊らせる。
曲の仕組みを感じ取らせる。	「かっこうワルツ」を通して聴く。 <ul style="list-style-type: none"> 曲の仕組みを理解する。 	曲の仕組みに注意しながら聴かせる。	<ul style="list-style-type: none"> 曲の仕組みがハンバーグや、サンドイッチのように、まん中の曲が違っているのに気付かせる。

表5 表現の内容と具体的学習内容例⁹⁾

学習指導要領の内容		具体的な学習内容
ア	<ul style="list-style-type: none"> 歌詞の内容を感じとる 曲想を感じとる 	<ul style="list-style-type: none"> 具体的な心情面、情景、状況を想起する。 語感を通して詩のニュアンスを感じとる。 レガートは、なめらかに、ゆったりとした、滑るように。 マルカートは、わくわく、うきうきする気持で。 スタッカートは、跳動感に豊んで、はずんだ感じで。
イ	<ul style="list-style-type: none"> 豊かな響き 明確な発音 	<ul style="list-style-type: none"> 明るい、澄んだ、まろやかで、遠くまで届く声。 舌や咽に力が入りやすい破裂音（タ、カ行）や摩擦音（サ音）、鼻濁音、等に気を付ける。
ウ	<ul style="list-style-type: none"> 基礎的な奏法 美しい音色 	<ul style="list-style-type: none"> リコーダー、ギター、鍵盤楽器の構え方、調弦法ピッチ、息圧、フィンガリング、等、その楽器にふさわしい奏法を身につける。 透明感があり、芯のある、よく整った音色。
エ	<ul style="list-style-type: none"> 声部の役割 全体の響き 	<ul style="list-style-type: none"> 響き合う歌声が主旋律、対旋律、オブリガートなのかを感じ取る。 音量のバランスが良いか、発声や奏法を揃える。
オ	<ul style="list-style-type: none"> 旋律と和声とのかかわり 主旋律と他の旋律とのかかわり 	<ul style="list-style-type: none"> 合唱や合奏で、自分のパートを全体の響きの中に解け込ませたり、カノン、フーガ、オブリガート、等の手法を体験する。
カ	<ul style="list-style-type: none"> フレーズによる曲のまとまり 	<ul style="list-style-type: none"> 音のつながりや切れるところを感じる。 続く感じ、終わる感じをつかむ。
キ	<ul style="list-style-type: none"> 楽曲を特徴付けている音楽の諸要素の働き。 	<ul style="list-style-type: none"> 他の楽曲にない表現を創り出している、リズム、拍子、メロディー、ハーモニー、強弱、速度、音色、形式、等の要素を見つける。
ク	<ul style="list-style-type: none"> 短い歌詞に節づけ 楽器のための簡単な旋律を作る 	<ul style="list-style-type: none"> 身近な言葉（名前、挨拶）に節づけをする。 リコーダー等でリズムや音階を限定して吹く。
ケ	<ul style="list-style-type: none"> 自由な発想による即興的な表現や創作 	<ul style="list-style-type: none"> 他の人と違った音作りをして、色々な音色を創り出したり、人と違った体の動き方をする。

表6 絵図式による指導案例²⁴⁾

目 標	学 習 活 動		指導上の留意点
リズム表現の工夫をさせる。	親指と人差し指で鳥の口ばしを作り、「かっこうワルツ」のリズム打ちをする。		
指導内容	学 習 活 動	具 体 的 な 指 示	指導上の留意点
発声練習	「アマリリス」をラリラリで歌う。	<ul style="list-style-type: none"> • ピックリ目玉とニコニコ顔で上顎の上から歌おう。 	<ul style="list-style-type: none"> • 口をよく開いて、言葉をハッキリ歌わせる。 • 顔の表情と目に注意をむけさせる。
柔らかく響きのある出し方	裏声で「こわいよー」「ヤッホー」の言葉を発声する。	<ul style="list-style-type: none"> • 額に声をあつめて、ゆっくりボールを投げるように、声を速くへ出そう。 	<ul style="list-style-type: none"> • 猫ま鳴きまねをさせる。 • 話し言葉を裏声で発声させる。 • 指先を額に軽くあて、そこに響きを集中させる。

思われる。

これと類似した作業として、平成元年度中学校学習指導要領の表現内容の事項を、具体的な内容に掘り起こしてみると表5ようになる。

その他、表6は具体的な絵図式による指導案の事例である。

これらの具体的記述は、主題による題材構成と、楽曲による題材構成では、広い領域と限定した内容との違いはあるものの、授業展開では単独の教材を展開する場合が多く、これらの表象言語や絵図は楽曲の教育内容に直接かわり、主題構成であってもそれを束ねることにより、全体へ結びつけていけるものである。

そして、具体的記述は、その楽曲と目標を照らし合わせ、その楽曲がもっている内容をかもし出し、練っていくための言葉への置きかえなのである。

Ⅳ 結

これまで、授業を生き生きとした場とするための指導案のあり方を、音楽と子どもの感覚に結び

つけた具体的指導目標の用語として模索してきた。それは、鳴り響く音を想起させる用語であり、子どもの内面に直接うったえていく言葉であった。

これら指示語ともなる具体的な言葉は、学習内容の具体的なメッセージを伝えるものであり、教える内容の習得を具体的に示す指導案の改善につながっていくものと考えられる。

このような用語を仕組む場合、教師が意図した一連の展開の中で、その流れを想像し、その流れの中で子どもの反応や活動の様子などを、頭の中に描いておく必要がある。そして、何を授業で目指すのかを教師と子どもが共通に理解し、具体的なものとして、互いにもっておかなければならない。それは、教師と子どもが相互活動するなかで教材を仲立ちとして、授業の中で一つの音や響きが創り出され共有されていくからにほかならない。

そうした過程の中で、子どもたちは音に敏感になり、音楽への希求が生まれ、発見や驚きが見える子どもに育っていくのではないだろうか。

これからの教育が指向している個の独自性を図

り、個が見える教育を構築していくためには、教師は全ての子どもに確かな力をつけさせる努力を続けなければならない。

今後の課題としては、教師、子ども、教材をとりむすぶコミュニケーションとしての発問、指示

の追究がこれまでに必要であり、子どもたちの情意面や探求心を育て学習意欲を増すための、問いかけをも含めた研究が望まれているといえよう。

注

- (1) 「教わる側の発言」『季刊音楽教育研究』No.51 P.75
- (2) 「指導案研究の総括と研究課題」安藤修平『授業研究』No.311 P.82~83
- (3) 吉本均「統授業成立入門」P.58~64 明治図書 1988
- (4) 「中等科音楽教育法」音楽之友社 1989 P.31
- (5) 八木正一「授業行為としての指導語の研究」『音楽がおもしろくなる授業のくふう』P.29~30 音楽之友社 1989
- (6) 文部省「小学校指導計画の作成と学習指導」P.62 教育芸術社 1980
- (7) 「小学校音楽科教育法」P.45 音楽之友社 1989
- (8) 大和淳二「小学校における音楽の授業」P.73 ぎょうせい 1981
- (9) 文部省「中学校指導計画の作成と学習指導」P.21 教育芸術社 1982
- (10) 福岡教育大学附属福岡中学校 教育実習指導案
- (11) 「授業が生きる鑑賞指導」P.76 音楽之友社 1984
- (12) 北九州市立教育センター「わかる授業の設計とその実際」P.146 1986
- (13) 「授業研究」No.317 P.85 1987
- (14) 福岡県水巻町立水巻中学校 昭和63年委嘱研究
- (15) 千成俊雄編著「達成目標を明確にした音楽科授業改造入門」P.170 明治図書 1982
- (16) 岩下修「授業の流れがわかる指導案とは」『授業研究』No.324 P.8
- (17) (9)の文献 P.49~50
- (18) (9)の文献 P.55, P.58
- (19) (6)の文献 P.70
- (20) 平成元年度中学校学習指導要領(音楽科)第1学年の表現「表現の活動を通して、次の事項を指導」の項目より内容を抽出したものである。
- (21) 「かっこうワルツ」は、注(6)の文献 P.70。「アマリリス」は、新潟県立教育センター実践研究集録 No.25より、「考え方の表」と「本時の展開」を合わせ、岩崎が作制したものである。P.10, P.15